

玩具③

当館所蔵の中国玩具は、実にさまざまな材料で作られている。常設展示中の玩具だけを見ても、木、土、布、紙、竹、皮革、金属、高梁ガラ等、多彩な素材が挙げられる。当館一階の「中国・台湾コーナー」には、それぞれ銀杏（イチョウの種子）・ガラス・針金で作った昆虫や動物を展示しているが、これらは非常に写実的かつユーモラスなので、来館時にはぜひご覧頂きたい。

今回は、蟬の抜け殻および糝粉で作られた玩具を紹介する。前者は、中国語で辛夷と呼ばれるもの（コブシ・モクレン、ハクモクレンの蕾）に、蟬の抜け殻（以下、抜け殻と記す）の各部を付けた「毛猴」（日本語で小さなサルの意味）という人形である。



図1 アヘンを吸う毛猴
20世紀前半、中国にて蒐集 寝台の幅 6.5cm、奥行き 4.6cm、人形の全長 3.5cm、胴体部分の全長 1.8cm

図1は寝台上でアヘンを吸う毛猴である。10×6.2 (cm) の厚紙に紙製の赤い寝台（手すりは竹ヒゴ）が付いている。寝台には1匹の毛猴が、頭部を枕（径約2mmの植物の茎を短く切ったもの）に載せて横向きに寝そべり、左手で紙製の煙管を持ち、アヘンを吸っている。煙管の下には、盆に載ったアヘン用具2点が置かれている。なお、寝台上には別の枕と、その手前に付着した辛夷の毛があるので、製作時には向き合って寝そべる2匹の毛猴がいたと思われる。



図2 毛猴部分の拡大図

毛猴頭部には、抜け殻の頭部が付けられている。その中身は空洞でヘルメットのような形状をしており、補強のためか、内部に小さな木片が入っている。また、毛猴の腕部として抜け殻の後脚が、脚部として抜け殻の太い鎌状の前脚がそれぞれ用いられている。いずれも繋ぐ部分の辛夷の毛を予め取り除き、接着剤で付けている。腕より脚を太くしていること、および肘と膝に該当する部分の曲がり加減が、毛猴をより擬人化させている（図2）。

当館には図1資料の他に、自動車に乗る毛猴、滑り台とブランコで遊ぶ毛猴、花を売る毛猴、人力車や自転車に乗る毛猴など、いくつかの作例がある。しかし全て破損がひどく、残念ながら展示できる状態ではない。

材料の蟬の抜け殻と辛夷は漢方薬である。新京報社編『北京地理・民間絶藝』（当代中国出版社、2005年）には、毛猴誕生に関するエピソードが紹介されている。それは、清の同治年間（1862～1874）に、慶仁堂という薬屋の店員がいくつかの薬

材を弄んでいた時、抜け殻と辛夷とを白芨（止血等に用いる漢方薬。粘液質を多く含む。紫蘭の根）で繋ぎ合わせて毛猴を創作した、というものである。

続いて糝粉細工の玩具「麵人」について述べる。

糝粉細工とは糯米の粉を練って作った細工物のことだが、代わりに小麦粉を使用する場合もある。かつては寺廟の縁日などで実演を交えながら販売されたという。図3は、日本では七夕伝説として知られる「牽牛織女」を表した麵人である。表面には指紋の跡が残り、大部分は手で捏ねて作ったと思われる。赤・黄・緑・黒等の色が見られるが、筆で色を施すのではなく、予め「麵」に様々な色料を練り込んでいる。



図3 糝粉細工の人形「麵人」（牽牛織女）
20世紀前半、遼寧省瀋陽市にて蒐集 左端の女性（織女）の高さ 6.5cm 台の最大幅 19.6cm

各人の顔は目・眉・鼻など細部に至るまで精緻に表現される。図4は向かって左端の女性（織女）の頭部であるが、髪を含めた顔全体の長さは13mm、鼻の長さは1.5mm、髪や耳飾りの粒は径0.3mmにも満たず、一体どのような方法でこの細工を施したのか不思議である。



図4 織女の頭部拡大図

衣装も当然「麵」であるが、1枚ずつ下着から作り、内から順に着せている。

人形の中心には竹串を入れ、先端を台に突き刺して固定させている。頭部は胴体と別に作り、細い竹串で両者を結合する。ただ残念なことに麵人は虫害や乾燥に弱く、人物の頭部などが破損してしまっている。また、かつて台上は直方体のガラスケースで覆われていたが、現在は残っていない。

当資料は、牛飼いの男性（牽牛）と機織りの女性（織女）が、織女の母である西王母によって天の河の東西に引き離される場面を表している。向かって左端に位置し、両手で棒状の物を持つ女性は織女、中央で浮遊する3名は西王母と侍女たち、右側で牛を伴っているのが牽牛とその子供たちであろう。台上には中央を横断するように薄く「麵」が塗られ、その上に10羽ほどのカササギ（年に一度カササギが天の河に橋を架け、牽牛と織女が出会うという伝説がある）を配し、天の河を表現している。

山西省群衆藝術館研究館員の段改芳氏によると、当資料は清末民初に北京で人気があった「麵人湯」の作品ではないか、とのことである。麵人湯とは、湯子博（1882～1971）と彼の弟2人が創始した麵人製作の職人集団で、現在もその技法は継承されている。湯氏三兄弟は、従来は1本の竹串に1点の人形をさしただけの単純な構造だった麵人に、小さな箱の中に複数の人形を配置する手法を取り入れることで、より高い芸術性を持ち、鑑賞に耐える作品に発展させたという。